特別
又6
8551

上

四書文会

大阪

森林太郎

早稲田大学図書

アリアン人ノ英語ヲ知ル者ハ義務ニモアル筈ナリ

○お話ノ材ヲ多ク必ズ一度世サレタシ

鼎軒先生

森　林太郎

鼎軒先生よは一度もお目に掛かったことがない。私は少壮の頃、暇があれば本ばかり讀んでゐたので、名家の演說などをも、わざ〳〵聽きに往ったことが殆ど無い。それで餘所ながら先生のお顏を見る機會をも得ないでしまつた。

先生がアアリアン人種よ日本人も屬するとふことを論じた小冊子を出された頃であつた。友人上田敏君が宅の二階よ來て、話をしてゐられた。私はふいと思ひ出して、かう言つた。

「僕は此頃田口卯吉と云ふ人の書いた本を見たが、日本人がアアリア人種だと云ふ論断がしてある。そしてその理由として挙げてある。言語学上の事実が、問口ばかり廣くて手薄である。学者はちんな軽率な論断をしては困るぢやないか。」

かう云ふと、上田君が愛敬のある疊なり合つた歯を見せて、意味ありげに笑つた。「さうさね。少し深く研究して貰ひたかつた。田口さんは僕の親類だ。」

此時私は始て田口上田両家の關係を知つた。そして影軒先生が幾分か自分に接近して来られたやうに感じた。

その後幾年か立つた。

或る日又上田君が来て話してゐる間に、かう云はれた。「今度田口の子が卒業して君の部下になるから、どうぞ使つて遣つてくれ給へ。」これが文太さんが陸軍の薬劑官になつた時の事であつた。

それから何處やらまだ坊つちやんらしい處の殘つて居る文太さんに、役所でも役所の外でも、次第に心安くなつて、間接に故人影軒先生に接近したやうな心持がして来た。

彼此するうち、先生の七回忌が来た。そこで上田君からも文太さんからも、私に何か言へと云ふことである。

私は何を言ったら好かろう。

先生は公生涯と云ふ一面と、學者の經歷と云ふ一面とがある。公生涯の方は、私は餘り縁遠いから、何とも云ひ兼ねる。只學者としての鼎軒先生は軌いて、大體の事が言ひたい。

併しかうした離して、先生の一面丈を說くと云ふことは、稍無理なやうなすまいかと思はれる。それは先生の生涯と學者生涯とは密接してゐるからである。

先生のあらゆる學問上の意見は、デモクラチイの影でないまでも、デモクラチスムの影を印してゐる。それで官學と異なる。此點から言へば、鼎軒先生の學問は福澤先生に近い。

私は一般の人格の上から、兩先生を軒輊しようとは思はない。併し學問に於いては、鼎軒先生の勝つてゐられる處がある。私がそれが言ひたい。

私は日本の近世の學者を、一本足の學者と二本足の學者とに分ける。

新しい日本は、東洋の文化と西洋の文化とが落ち合つて湧き出てゐる國である。そこで東洋の文化丈に立脚してゐる學者もある。西洋の文化に立脚してゐる學者もある。どちらも一本足で立つてゐる。

一本足で立つてゐても、深く根を卸した大木のやうに、

その足よ力が入つてゐると、推されても倒れないやうな人もある。さう云ふ人は、國學者や漢學者のやうな東洋學者であらうが、西洋學者であらうが、有用の材である事は相違ない。

併しさう云ふ一本足の學者の意見は偏頗である。偏頗であるから、これを實際よ施すとなると、差支を生ずる。東洋學者よ從へば、保守よなり過ぎる。西洋學者よ從へば、急進よなり過ぎる。現ある許多の學問上の衝を菅藤や衝突は、此二要素が爭つてゐるのである。

そこで時代は別よ二本足の學者を要求する。東西両洋の文化を、一本づつ足で踏まへて立てゐる學者を要求する。

眞よ穩健な議論はさう云ふ人を待つて始て立てられる。さう云ふ人は現代よ必要なる調和的要素である。

然るよさう云ふ人は最も得難い。日本人よ取つては、漢學をすると云ふことが、既よ外國の古代文學を學ぶのである。西洋人が希臘羅馬の文學を學ぶと同等の難事である。その上よ又西洋の學問をしなくてはならない。これも單よおぼろゲロットな人よは、比較的容易よなられようう。猶進んで西洋の文化が真よ味はれるやうならうと云ふのは、隨分偏大な要求である。

私は鼎軒先生を、この最も得難い二本足の學者

として、大いに尊敬する。

先生が一本の足で、西洋の文化をどれ丈しっかり踏まへてゐられたか、他の一本の足で、東洋の文化をどれ丈一つかり踏まへてゐられたか。それを一々具體的に研究するのは、頗る興味のある問題であらう。憾むらくは私は今それ程の餘裕を有せない。

只大體から見れば、先生の重點は西洋文化の地面に落ちてゐた。併し隨分恒廣く股を開いて、東洋文化の地面をも踏んでゐられた。先生は西洋文化の眼を以て東洋文化を觀察して、彼を我に移して、我の足らざる所を補はうとしてゐられた。

先生は此意味に於いて種子を蒔いた人である。併し其苗は苗の儘である。存外生長しない。それは二本足の學者でなくては、先生の後繼者となることが出來ないからである。その二本足の學者が容易に出て來ないからである。

そして世間では一本足同志が、相愛らず葛藤を起したり、衝突し合つたりしてゐる。

（完）

2